



春
野
針
山
記
五
冊
中



特別
~ 13
4203
14

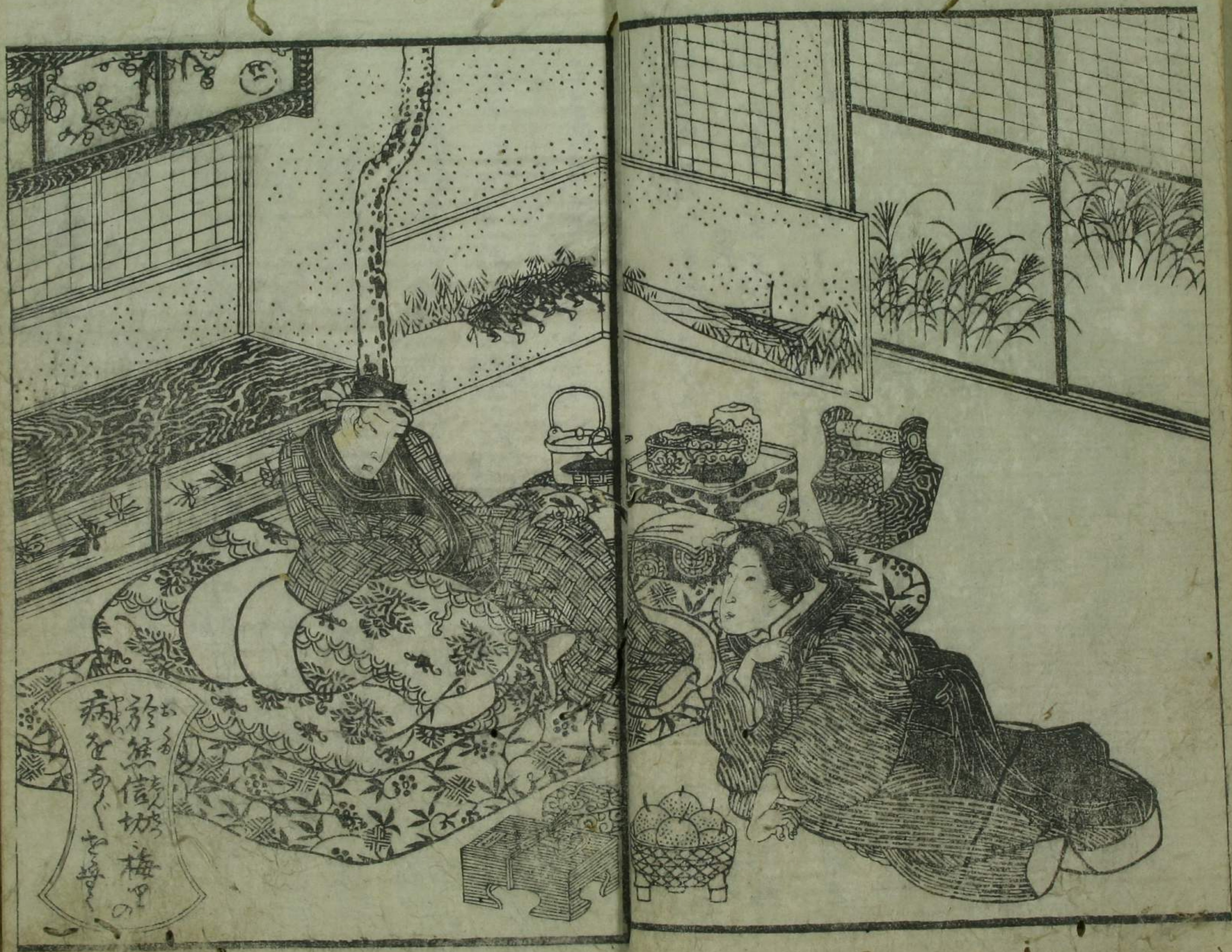


人の世は疾きものなり一人の世は疾く一人の世をさして
病に罹りて自ら病を治す事ありとあるは世にありてありける人
是れ也 女房を由おぼえ万端の事ありて血縁の
別家吉き事ありとありてありける通ひ勤のま死人なり
世に疾きものなり病に罹りて自ら病を治す事ありとあるは世にありてありける人
是れ也 女房を由おぼえ万端の事ありて血縁の
別家吉き事ありとありてありける通ひ勤のま死人なり
世に疾きものなり病に罹りて自ら病を治す事ありとあるは世にありてありける人
是れ也 女房を由おぼえ万端の事ありて血縁の
別家吉き事ありとありてありける通ひ勤のま死人なり

梅里の壮年だけけりて苦勞の知らずなり月日あはれ
病に罹りて自ら病を治す事ありとあるは世にありてありける人
是れ也 女房を由おぼえ万端の事ありて血縁の
別家吉き事ありとありてありける通ひ勤のま死人なり
世に疾きものなり病に罹りて自ら病を治す事ありとあるは世にありてありける人
是れ也 女房を由おぼえ万端の事ありて血縁の
別家吉き事ありとありてありける通ひ勤のま死人なり

旦那さんお茶の味もさうさ 柿へ行くそまふ今ねのち茶
う小唄へへい昨日のハお辰だんが流しと仕舞まうさ 柿へた
う けさのち
柿の 今ね茶とりの花 主桂さぬハ何と何月 志申の
子引 今ねハ 山を舞 花散らすと 花散らすと 柿へようりく
さす
さす所へ 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の
あう 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと

坂町へ行くお茶の味もさうさ 柿へ行くそまふ今ねのち茶
さす所へ 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の
あう 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと
性まうさ 柿へ今ね 花散らすと 花散らすと 花散らすと 花散らすと



おのゝ
於無儀切梅
病を奇くや

おぼろげな
舵投多岐のつと 船方紙燈籠せし 常法修び小舟のせん
さし葉のまよて 梶のまよの二分がわの大蛇の小舟の猪
細蛇の白葉まの 橋まのくの水蛇の海をにつけ湯
のく水葉ちりりんの切そのまよ光は出さるるを志
て 橋付の船のつと 見よまよの音呂 橋付
おぼろげのまよまよ 常法修び小舟のせん
田んぼのくががー大蛇のまよ 結方の人ふよりて 好修が
あつちつとよまよまよ 目まよまよ 常法修び小舟のせん

よまよまよ 梅里の迷ひもめりともなる 女とおぼせらる
あつちつとよまよまよ 目まよまよ 常法修び小舟のせん
おぼろげのまよまよ 常法修び小舟のせん
田んぼのくががー大蛇のまよ 結方の人ふよりて 好修が
あつちつとよまよまよ 目まよまよ 常法修び小舟のせん

小 一へい太のお葉子のお怒りせんがお情なさいませ〜
 左様う土籠のまゝお入るにせよ〜
 中町ううゆい〜
 小 一へいト 柳へ 今貝の拾別お弟様あるてませ〜
 出末おへ 今アアサお前様う 今が大事の所トヤア
 ありませんうま〜おとかし〜
 防〜く 防〜く 防〜く

大の若共市十三

第廿八章

再洗お中へ 相取町お身を 君の居る中へ
 方由大畧ハ幸海くかの横濱の都へ
 函元へ押込とかり 春公院をババお君の
 中へ 中へ 中へ
 今日由二階より〜
 う〜 柳里の情あのおとえ来お中を男ぞと知つ〜



木玉忠之丞
再縁を
むすぶ



木玉忠之丞

笑ひながら本を讀んで居る方齊後ろり御様よ
さんトアアあの申さん物の弁を一公ふ取て着ておの
れおますん 一やお玉さん何時の月ふそ如く来て
ご 玉トニ 一モウお一先刻来き一けほど由居り一公ふ
あつちおるるさろりまぐ 一まて居り一おア
お由実があの程く私ハ淋しくしてあつち申
てゆえんゝ氣はあぐさまふと心付く居るのふお前側へ
来く居るがうの由利ぢふお互のハ恨むこゝろ 玉トニ居る

トアアあのませんハね私のお咄一て由は私と心付く
まゝとけれどもお前お後一とてお在るさるのふはさま
まゝ一とてお前だごらうとまねお傍一て居り一お
うゝかゝるゝむ 悪くお思ひでるヨ 一おハくハゆめとゆ
いふまゝと由免あなしまゝ一おハくはるるゝ一まり
と由おとあゝとまます 一おハくハゆめとゆま
まのヨトおハく一おハくはるるゝの毒まゝお由
めく濟ぐと 一おハくはるるゝの毒まゝお由

どうぞ 何卒 様 思へて 下さる。 正に 御由 にお前 さま せむ
舞の さまの 云々 のこと 手紙の 気持 さまの せむ
ツイ 気が けう なる ぞ 思ひ こと 返さ さま 何卒 御免 さま
申す こと 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おや さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
ごよ 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
さ 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま

おの 御由 さま

さへ 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま
おの 御由 さま 御由 さま 御由 さま 御由 さま

おの 御由 さま

知つて居ても居てもその中先の殿さむの
 誠より洗くといふ何ともなむかうのまは
 多で業由まど十八九を
 洗すもその
 うとて一人や半分
 雨が
 うをく
 前さん

ござのまきう
 ござのまきう
 わるな
 ト

狂訓亭門人
 為永春曉校合
 為永春江補助

風月
 春告鳥卷之十四終

糸結志良辺 第二編 全三冊 爲永春水作

藤嘉津良 第四編 全三冊 同 著

乙女七種 第二編 全三冊 爲永春水作

乙女七種 第三編 全三冊 同 作

右の種出まゝうすしりし

